

6	尾張旭	尾張旭市立旭丘小学校	フリガナ ハヤシ リョウ 氏名 林 諒
分科会番号	3	分科会名	社会科教育（小学校）

if 論を使い、意思決定・政策の意図を考え、歴史的事象を理解しようとする児童の育成

## 1 主題設定の理由

歴史学習を通して、児童自身が主体的に考え、知識の暗記にとどまらず「だから～なのか」と納得した上で歴史的事象を理解する授業を行っていきたいと考えた。本学級の児童は、授業中のつぶやきや挙手も多く見られ、社会科の授業に対して前向きな児童が多い。1学期末に行った学習の振り返りアンケートでは、約9割の児童が社会科に対して前向きな回答をしており、苦手意識はあまり見受けられなかった（資料1）。

計（33人）	◎	○	△
理解度	21人	11人	1人
意欲度	21人	10人	2人

[資料1 学習の振り返り]

しかし、テストの正答率をみると、点数が高い観点は単語を答えるなどの「知識・技能」の面であり、「思考・判断・表現」では児童間で差が開き、特に記述問題の正答率が低く空白の児童も多くみられた。つまり、表面的な知識の蓄積に留まり、政策や当時の様子の内容の理解が弱く、「なぜ」「どうして」と問われた時に言葉で表現することが苦手であると考えられる。また、今年度から始まる愛知県中高一貫校付属中学の入学選抜における適性検査の問題をみると、会話文・資料を読み取り正しい選択肢を選ぶ問題が提示され、情報を整理・活用する力が求められていることがわかった。このことから、知識を獲得するだけでなく、その知識を活用する力が求められ、「なぜ」「どうして」と考える主体的な学習が必要であると考えた。

そこで、本研究では、歴史学習の「思考・判断・表現」に焦点を当て、歴史的事象を知るだけでなく、歴史の仮定を考えさせることで主体的な学習につながり意思決定や政策の意図がより理解しやすくなると考え本研究を行うことにした。

## 2 研究の内容

### (1) めざす子どもの姿

#### めざす子どもの姿

if 論を使い、意思決定・政策の意図を考え、歴史的事象を理解しようとする児童

### (2) 研究の仮説と手立て

#### ① 仮説

##### ア 仮説 I

思考力の土台となる基本的知識の定着を図るために、毎時間、隣同士で問題を出題し合う

時間を確保すれば、自分のわかっていないところに気付き、前時の復習や知識の蓄積ができるだろう。

#### イ 仮説Ⅱ

歴史の仮定を考えることで、メリット・デメリットを理解し、意思決定や政策の意図の「なぜ」「どうして」を主体的に考えることができるだろう。

#### ② 仮説に対する手立て

##### ア 仮説Ⅰに対する手立て「1分テスト」

毎時間、授業の始めの1分間を使い隣同士で問題を出題し合う。問題を出す側・答える側は教科書やノートから探すことで、クイズ感覚で知識の復習を図る。

##### イ 仮説Ⅱに対する手立て「if論を使った歴史の理解」

「もし、幕府を鎌倉ではなく愛知に開いていたら」など歴史の仮定を「if論」と定義し、「if論」を活用することで人物の行動や政策の意図を深く考え、「だから～なのか」と納得して理解を深められるようにする。

### 3 検証

研究対象 小学校 6年生 (33名)

単元計画 社会科 「武士の世の中へ」(本実践は「鎌倉幕府はなぜ140年も続いたのか」)

時	学習を通して獲得させたい知識
1 2	<b>平清盛はなぜ権力を持つことができたのか。</b> ・源氏との戦いに勝ち、平氏が権力をにぎった。 ・藤原氏と同様、天皇家と血縁関係を結び、貴族の中で高い地位を得た。
3 4 5 6	<b>鎌倉幕府はなぜ140年も続いたのか。</b> ・鎌倉の地が幕府を開くのに適していた。 ・御恩と奉公の封建制度を通し、武士との結びつきを強くした。 ・権力の分散を図り、武士による政治体制をつくった。 ・承久の乱で勝利し、勢力を拡大させた。
7	<b>鎌倉幕府はなぜ力が弱くなってしまったのか。</b> ・元寇をきっかけに御恩と奉公が崩れ、武士の不満が高まり封建制度が成り立たなくなった。

### 4 研究の実際

#### (1) 手立て① 「1分テスト」

毎時間、授業の始めの1分を使って、隣の児童とペアをつくり、問題を出題し合う活動を行った(資料2)。1分テストでは2つのルールを決めた。1つ目は、語句や人物名を問う問題ではなく、相手が悩むような歴史の内容に関わる問題を出題することである。一問一答も知識の復習になるが、隣同士の会話のやり取りが少な



【資料2 1分テスト】

くなり、見つけることも簡単なため「なぜ」や「どうして」など思考も問う問題を出題し合える姿を求めた。2つ目は、解答者が迷っている時は、ヒントは伝えてもいいが、答えは教えてはいけないことである。自らの力で答えを探すことで、学びの質を上げ主体的に復習に取り組む姿を確保するためである。出題者は「何ページの図をみるとわかるよ」、「前回の授業のノートに書いてあるよ」など答えにつながるヒントを出し、社会科に苦手意識をもつ児童も資料を読み取り、答えることができた。2つのルールを通して、児童は「あ、それなんだったっけ」「これは勉強したからわかる」など隣同士の話し合いの中で主体的に復習に取り組む姿が見られた。また、回数を重ねていく内に、休み時間に教科書を読み問題を探している児童や、出題された問題の答えに線を引いている児童など、自分なりの勉強方法を見つけている児童も見られ、復習を習慣化することができた。

(2) 手立て② 「if 論」を使った歴史の理解

本単元を通して、平氏の政策と鎌倉幕府を比較しながら、「源頼朝は栄華を極めた平清盛よりも何がすぐれていたのか」そして、「武士として初めて幕府を開き、なぜ約140年という長い間権力を持ち続けることができたのか」また、「なぜ鎌倉幕府は力を失ってしまったのか」を理解させるため「if 論」を活用した発問を3つ設けた。

「if 論」を活用した発問	ねらい
① もし、源頼朝が京都や西日本に幕府を開いていたら幕府はどうなっていたか。	朝廷・平氏の領地に注目させ、周りに幕府の敵が多すぎるため、西日本に開かなかったことに気付かせる。
② もし、御恩と奉公の制度がなかったら幕府はどうなっていたか。	褒美がないことで武士の不満がたまり、鎌倉幕府が成り立たないことに気付かせる。
③ もし、あなたが御家人だったら鎌倉幕府に対してどんな気持ちになるか。	元寇により、封建制度が崩壊し、武士の信頼がなくなり、不満がたまり幕府の力が落ちたことに気付かせる。

ア 地理的視点から幕府を捉える

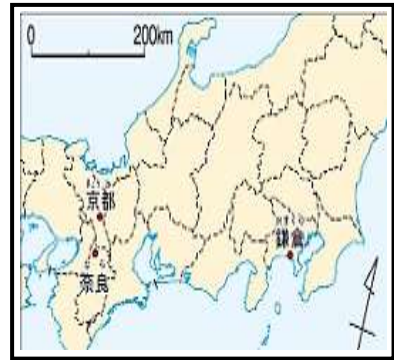
① 鎌倉以外の場所で考える

日本地図を使い鎌倉の位置を確認して、「なぜ源頼朝は鎌倉に幕府を開いたのか」を2時間分の大きな問いとして授業を進めた。教科書では鎌倉の地の利点を中心に書かれているが、本実践は if 論①の発問を通し、「なぜ鎌倉以外の場所ではダメなのか・何か不都合があったのか」と疑問を持たせた。児童は、教科書や資料集を基に、京都や西日本には何があるのかを調べ、原因を探した(資料3)。そして、京都・奈良には朝廷があり、貴族が多数いるため、武士の台頭を快く思っておらず、「武士に対し敵対心があること」。西日本は元々平氏の領地だったことから平氏



【資料3 平氏の分布図】

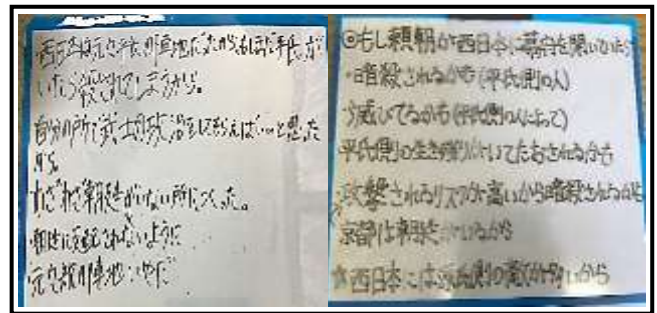
の残党や源氏に恨みをもつ者がいつ反乱を起こしてもおかしくない状態のため「安定した政治を行うには、リスクが高い」ことを資料から読み取った。この2つの情報から、京都や西日本には、頼朝にとって幕府を開き政治を進めるにあたり敵が多く不利になることが分かり、あえてそれまで政治の中心であった京都や奈良から離れている東日本の鎌倉に幕府を開いたことの利点について理解することができた。また、今年度の教科書には京都・奈良と鎌倉の位置



【資料4 追加された資料】

関係の資料が新たに追加された（資料4）。幕府と平氏の関係だけではなく、朝廷との位置関係にも触れ、資料から一目で2つの距離がどれだけ離れているかがわかり、頼朝が鎌倉に幕府を開いた理由が分かりやすくなった。

資料の読み取りを進める中で、個人の活動だけでは資料の読み取りが得意な児童と苦手な児童の理解の差が大きいということがわかった。そこで、個人で考えた後にグループで意見をまとめる活動を行った。考えを自分たちの言葉で表す活動を通して、資料から分かったことを、知識を活用して「なぜ」「どうして」と理由を踏まえてまとめることができていた。また読み取りが苦手な児童も友だちの意見を聞き、「そうか」と納得する姿も見られ理解の差を縮めるとともに全員が参加する授業を展開することができた（資料5）。



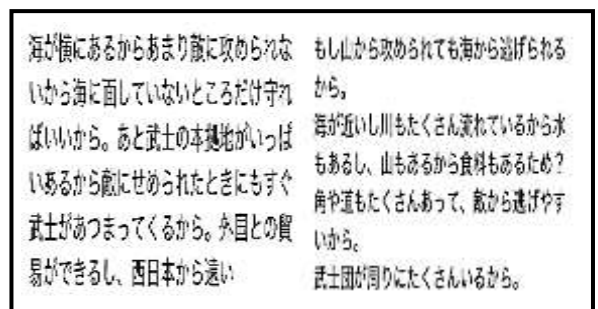
【資料5 グループのまとめ】

## ② 鎌倉の地形の良さを考える

次時では、本時の知識を踏まえ、「東日本の利点は分かったが、なぜ頼朝は鎌倉を選んだのか」と疑問を持たせ、鎌倉の地の利点を考えさせる活動を行った（資料6）。敵と幕府の立場から地の利点を考えさせた。敵の立場では、「四方八方が山に囲まれていて見通しが悪く攻めづらい」「道が狭いため馬や多人数で一気に攻められない」など敵にとって戦いづらいことに気付くことができた。幕府の立場では、「周りに山があることで守りやすいこと」「海があることで負けた時に逃げることができること」「近くに武士団の本拠地が多くあり加勢にきてもらえること」など地形を生かした「守りやすさ」や味方が近くにいて「戦いの際に有利であること」に気付くことができ、敵と幕府、2つの視点から



【資料6 鎌倉の地形】



【資料7 鎌倉の地形のまとめ】

鎌倉の地を選択したことの良さについてまとめることができた（資料7）。

イ 制度から幕府を考える

鎌倉幕府の強さを考えるにあたって、鎌倉の地理的条件だけではなく制度の面からも幕府の工夫を捉えさせ、「清盛と頼朝が武士であるにも関わらず、何が違ったのか」を大きな視点として授業を展開した。

① 御恩と奉公の関係から考える

まず、御恩と奉公の関係図を読み取る活動を行った（資料8）。将軍から御家人に対し御恩として領地を渡していること、御家人から将軍に対し奉公として鎌倉の警備を行っていることに注目し、主従関係が結ばれていることに気付いた。その気づきを踏まえてif論②の発問を通し、「なぜ頼朝がこのような制度を整えたのか」を考えさせた。児童は、武士の立場と幕府の立場に立ち、制度がなければどんな不都合があるかを考えた。武



【資料8 御恩と奉公】

士の立場では、「恩賞がなければ戦う意義がなくなる」とや「幕府への信頼がなくなること」など不満につながることに気付いた。幕府の立場では、「武士をないがしろにすると清盛同様に多くの武士の信頼を失うこと」や、「不満がたまったら武士の反乱によって幕府が倒される危険があり、長く続かないかもしれないこと」に気付いた。幕府と武士にとってどちらにもメリットがあり武士の立場を尊重するためにも必要不可欠な制度であることが理解できた（資料9）。

② 発問 もしこの制度がなかったら武士はどうなる？	② 発問 もしこの制度がなかったら武士はどうなる？
武士は何のために命をかけてまで幕府を守っているかわからなくなり平清盛みたいに頼朝を殺してしまうかもしれない。	恩賞がもらえなければ武士は戦い損になり、だんだん従わなくなってきた、いざは戦いになります。そうすれば、武士が離れた幕府は倒れるはずありません。

【資料9 児童の考え】

② 幕府の役割から考える。

次に幕府内で政所や問注所など役割が分かれていることに注目させ、「なぜ細かく役割が分かれているのか」を考えさせた。役割を分けることで機能を分散させ、将軍に力が集まりすぎないようにして、何か起きた時に素早く対応できるような工夫や平氏のように一族で役職を占めるのではなく、武士にそれぞれの役割を与えることで武士への信頼を示し、武士の不満を少なくすることができるのではないかと考えることができた。

ウ 鎌倉幕府のまとめ

ア・イの視点を通して、「なぜ鎌倉幕府は約140年続くことができたのか」を考え、言葉でまとめる活動をした（資料10）。右の児童は、表面的な知識にとどまらず、地形の部分と主従関係の利点を抑え、理由も含めてまとめることができた。また、清盛の政治と比較して、武士の信頼を得続けたことが幕府の強さにつながり、幕府が長く続いた理由だと理解する

**まとめ 幕府の強さかく**

幕府が長く続いた理由…  
 ① 政治の仕組みがうまく回っていたから  
 ② 武士の信頼を得続けたから  
 ③ 領地を渡して武士を育てたから  
 ④ 戦い役目を分けていたから  
 ⑤ 幕府の強さを保つてくれたから  
 ⑥ 幕府の強さを保つてくれたから  
 ⑦ 幕府の強さを保つてくれたから  
 ⑧ 幕府の強さを保つてくれたから  
 ⑨ 幕府の強さを保つてくれたから  
 ⑩ 幕府の強さを保つてくれたから

【資料10】 鎌倉幕府のまとめ

ことができた。

## エ 鎌倉幕府の衰退

本単元の最後に、「元寇」を取り上げた。初めて外国から攻められる戦いで、幕府は苦戦したが御家人たちの力でなんとか勝利し、侵略を防ぐことに成功した。外国から守り切ったことで「幕府は強い」「今まで以上に力が強くなるかも」と感じている児童も多く見られた。しかし、幕府がこの戦いで新たな土地を奪い取ることができなかったことを学習した。そこで、if 論③の発問を通し、幕府の対応に対する武士の気持ちを



【資料11 武士の気持ち】

考えさせた（資料11）。多くの児童が、

「土地がもらえないなら、もう協力しない」「ただ働きなんてありえない」など武士たちの幕府に対する反感・不満がつのったことに気付いた。そして、元寇後の幕府の対応を機に、幕府衰退につながり、鎌倉時代の終わりを理解することができた。

## 5 成果と課題

### (1) 研究の成果

手立て①の「1分テスト」では時代に関わらず、児童が政策や出来事など、忘れていそうな部分の復習ができ、思考の土台となる基礎知識を身につけさせることができた。ペアで問題を出し合ったことで、相手が悩む問題を考えたり、分からなかった所に線を引いたりなど一人一人が主体的に学ぶ姿を引き出すこともできた。また、回数を重ねるにつれ、「なぜ」「どうして」を問う問題を出し合う姿が多く見られるようになり、思考の深まりにもつながれたと感じる。手立て②の「if 論を使った歴史の理解」では「if 論」を活用したことにより、主体的に歴史的事象を捉え、思考の部分を深めることができた。「なぜ」「どうして」と発問するよりも、「if 論」を活用したことで史実を「懐疑的」「批判的」に見る視点が育み、「だから～なのか」と意思決定や政策の意図を納得して理解し、自分の言葉で表現することができた。また、もし「自分が御家人だったら」と考えることで、歴史を自分事として捉える考え方を身につけさせることができた。

### (2) 今後の課題

手立て①では、出題する問題に悩み、探せずに終わってしまう児童や、授業内容と離れた問題を出す児童も見られ、意図する復習の時間にできないことがあった。教師の声かけを工夫し、より有意義な活動にしていきたい。手立て②では、「もし～」と考えてみても捉え方によっては、どんな可能性も考えることができ、児童の考えが当時の歴史に合わないことが見られた。単元の中でいつ「if 論」を使うかを検討する必要があると考える。本研究は鎌倉時代のみで「if 論」を活用したが、今後は他の時代、特に時代の転換点で「if 論」を効果的に活用し、時代の前後のつながりを意識させ、現在の私たちにつながる歴史の変遷をより主体的に学んでいける授業づくりを心がけていきたい。